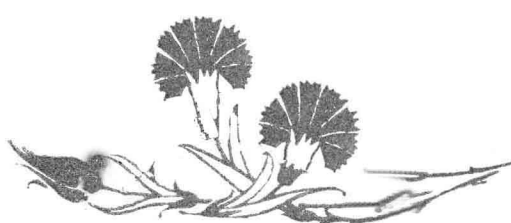
芥川龍之介集

芥川龍之介集

現代文豪名作全集



河出書房

現代文豪名作全集　第一回配本

芥川龍之介集

昭和二十八年一月十五日　初版発行
昭和二十八年五月二十五日　八版発行

定價　二八〇圓
地方賣價　二九〇圓

著者　芥川龍之介
編集者　吉田精一
發行者　東京都千代田區神田小川町三ノ八　河出孝雄
印刷者　東京都文京區諏訪町五七　鈴木才治

發行所　東京都千代田區神田小川町三ノ八　株式會社　河出書房
電話神田(25)三一七四番

鈴木印刷・岸田製本

目次

羅生門……三
鼻……九
孤獨地獄……一五
野呂松人形……一八
芋粥……二一
世之助の話……三四
偸盗……四一
或日の大石内藏助……八四
戲作三昧……九二
蜘蛛の糸……一二

地獄變……一一五
開化の殺人……一三九
奉教人の死……一四七
枯野抄……一五六
あの頃の自分の事……一六三
きりしとほろ上人傳……一七六
蜜柑……一八七
沼地……一九〇
舞踏會……一九二
秋……一九七
南京の基督……二〇七
杜子春……二一七

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

秋山圖……二二六
山鳴……二三三
藪の中……二四一
將軍……二四九
トロッコ……二六四
六の宮の姫君……二六八
お富の貞操……二七五
お時儀……二八二
一塊の土……二八六
糸女覺え書……二九五
大導寺信輔の半生……三〇一
年末の一日……三一二

點鬼簿……三一五
玄鶴山房……三二〇
蜃氣樓……三二二
河童……三二七
齒車……三七二
或阿呆の一生……三九五
西方の人……四〇九
續西方の人……四二三
侏儒の言葉……四三一
年譜……四七一
解說……吉田精一

芥川龍之介集

羅生門

或日の暮方の事である。一人の下人が、羅生門の下で雨やみを待つてゐた。

廣い門の下には、この男の外に誰もゐない。唯、所々丹塗の剝げた、大きな圓柱に、蟋蟀が一匹とまつてゐる。羅生門が、朱雀大路にある以上は、この男の外にも、雨やみをする市女笠や揉烏帽子が、もう二三人はありさうなものである。それが、この男の外には誰もゐない。

何故かと云ふと、この二三年、京都には、地震とか辻風とか火事とか饑饉とか云ふ災がつゞいて起つた。そこで洛中のさびれ方は一通りではない。舊記によると、佛像や佛具を打碎いて、その丹がついたり、金銀の箔がついたりした木を、路ばたにつみ重ねて、薪の料に賣つてゐたと云ふ事である。洛中がその始末であるから、羅生門の修理などは、元より誰も捨てゝ顧る者がなかつた。するとその荒れ果てたのをよい事にして、狐狸が棲む。盗人が棲む。とうとうしまひには、引取り手のない死人を、この門へ持つて來て、棄てゝ行くと云ふ習慣さへ出來た。そこで、日の目が見えなくなると、誰でも氣味を惡るがつて、この門の近所へは足ぶみをしない事になつてしまつたのである。

その代り又鴉が何處からか、たくさん集つて來た。晝間見ると、その鴉が何羽となく輪を描いて、高い鴟尾のまはりを啼きながら、飛びまはつてゐる。殊に門の上の空が、夕燒けであかくなる時には、それが胡麻をまいたやうにはつきり見えた。鴉は、勿論、門の上にある死人の肉を、啄みに來るのである。——尤も今日は、刻限が遲いせゐか、一羽も見えない。唯、所々、崩れかゝつた、さうしてその崩れ目に長い草のはえた石段の上に、鴉の糞が、點々と白くこびりついてゐるのが見える。下人は七段ある石段の一番上の段に、洗ひざらした紺の襖の尻を据ゑて、右の頰に出來た、大きな面皰を氣にしながら、ぼんやり、雨のふるのを眺めてゐた。

作者はさつき、「下人が雨やみを待つてゐた」と書いた。しかし、下人は雨がやんでも、格別どうしようと云ふ當てはない。ふだんなら、勿論、主人の家へ歸る可き筈である。所がその主人からは、四五日前に暇を出された。前にも書いたやうに、當時京都の町は一通りならず衰微してゐた。今この下人が、永年、使はれてゐた主人から、暇を出されたのも、實はこの衰微の小さな餘波に外ならない。だから「下人が雨やみを待つてゐた」と云ふよりも「雨にふりこめられた下人が、行き所がなくて、途方にくれてゐた」と云ふ方が、適當である。その上、今日の空模樣も少からず、

この平安朝の下人の Sentimentalisme に影響した。申の刻下りからふり出した雨は、未に上るけしきがない。そこで、下人は、何を措いても差當り明日の暮しをどうにかしようとして――云はゞどうにもならない事を、どうにかしようとして、とりとめもない考へをたどりながら、さつきから朱雀大路にふる雨の音を、聞くともなく聞いてゐたのである。

雨は、羅生門をつゝんで、遠くから、ざあつと云ふ音をあつめて來る。夕闇は次第に空を低くして、見上げると、門の屋根が、斜につき出した甍の先に、重たくうす暗い雲を支へてゐる。

どうにもならない事を、どうにかする爲には、手段を選んでゐる遑はない。選んでゐれば、築土の下か、道ばたの土の上で、饑死をするばかりである。さうして、この門の上へ持つて來て、犬のやうに棄てられてしまふばかりである。選ばないとすれば――下人の考へは、何度も同じ道を低徊した揚句に、やつとこの局所へ逢着した。しかしこの「すれば」は、何時までたつても、結局「すれば」であつた。下人は、手段を選ばないといふ事を肯定しながらも、この「すれば」のかたをつける爲に、當然、その後に來る可き「盗人になるより外に仕方がない」と云ふ事を、積極的に肯定する丈の、勇氣が出ずにゐたのである。

下人は、大きな嚏をして、それから、大儀さうに立上つた。夕冷えのする京都は、もう火桶が欲しい程の寒さである。風は門の柱と柱との間を、夕闇と共に遠慮なく、吹き抜ける。丹塗の柱にとまつてゐた蟋蟀も、もうどこかへ行つてしまつた。

下人は、頸をちゞめながら、山吹の汗衫に重ねた、紺の襖の肩を高くして門のまはりを見まはした。雨風の患のない、人目にかゝる惧のない、一晩樂にねられさうな所があれば、そこでともかくも、夜を明かさうと思つたからである。すると、幸門の上の樓へ上る、幅の廣い、これも丹を塗つた梯子が眼についた。上なら、人がゐたにしても、どうせ死人ばかりである。下人はそこで、腰にさげた聖柄の太刀が鞘走らないやうに氣をつけながら、藁草履をはいた足を、その梯子の一番下の段へふみかけた。

それから、何分かの後である。羅生門の樓の上へ出る、幅の廣い梯子の中段に、一人の男が、猫のやうに身をちゞめて、息を殺しながら、上の容子を窺つてゐた。樓の上からさす火の光が、かすかに、その男の右の頰をぬらしてゐる。短い鬚の中に、赤く膿を持つた面皰のある頰である。下人は、始めから、この上にゐる者は、死人ばかりだと高を括つてゐた。それが、梯子を二三段上つて見ると、上では誰か火をともして、しかもその火を其處此處と動かしてゐるらしい。これは、その濁つた、黄いろい光が、隅々に蜘蛛の巣をかけた天井裏に、搖れながら映つたので、すぐにそれと知れたのである。この雨の夜に、この羅生門の上で、火をともしてゐるからは、どうせ唯の者ではない。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

下人は、守宮のやうに足音をぬすんで、やつと急な梯子を、一番上の段まで這ふやうにして上りつめた。さうして體を出來る丈、平にしながら、頸を出來る丈、前へ出して、恐る恐る、樓の內を覗いて見た。

見ると、樓の內には、噂に聞いた通り、幾つかの死骸が、無造作に棄てゝあるが、火の光の及ぶ範圍が、思つたより狹いので、數は幾つともわからない。唯、おぼろげながら、知れるのは、その中に裸の死骸と、着物を着た死骸とがあるといふ事である。勿論、中には女も男もまじつてゐるらしい。さうして、その死骸は皆、それが、嘗、生きてゐた人間だと云ふ事實さへ疑はれる程、土を捏ねて造つた人形のやうに、口を開いたり手を延ばしたりして、ごろごろ床の上にころがつてゐた。しかも、肩とか胸とかの高くなつてゐる部分に、ぼんやりした火の光をうけて、低くなつてゐる部分の影を一層暗くしながら、永久に啞の如く默つてゐた。

下人は、それらの死骸の腐爛した臭氣に思はず、鼻を掩つた。しかし、その手は、次の瞬間には、もう鼻を掩ふ事を忘れてゐた。或る強い感情が、殆ど恐この男の嗅覺を奪つてしまつたからである。

下人の眼は、その時、はじめて其死骸の中に蹲つてゐる人間を見た。檜皮色の着物を着た、背の低い、痩せた、白髮頭の、猿のやうな老婆である。その老婆は、右の手に火をともした松の木片を持つて、その死骸の一つの顏を覗きこむやうに眺めてゐた。髮の毛の長い所を見ると、多分女の死骸であらう。

下人は、六分の恐怖と四分の好奇心とに動かされて、暫時は呼吸をするのさへ忘れてゐた。舊記の記者の語を借りれば、「頭身の毛も太る」やうに感じたのである。すると老婆は、松の木片を、床板の間に挿して、それから、今まで眺めてゐた死骸の首に兩手をかけると、丁度、猿の親が猿の子の虱をとるやうに、その長い髮の毛を一本づゝ拔きはじめた。髮は手に從つて拔けるらしい。

その髮の毛が、一本づゝ拔けるのに從つて、下人の心からは、恐怖が少しづゝ消えて行つた。さうして、それと同時に、この老婆に對するはげしい憎惡が、少しづゝ動いて來た。——いや、この老婆に對すると云つては、語弊があるかも知れない。寧、あらゆる惡に對する反感が、一分毎に強さを增して來たのである。この時、誰かがこの下人に、さつき門の下でこの男が考へてゐた、饑死をするか盜人になるかと云ふ問題を、改めて持出したら、恐らく下人は、何の未練もなく、饑死を選んだ事であらう。それほど、この男の惡を憎む心は、老婆の床に挿した松の木片のやうに、勢よく燃え上り出してゐたのである。

下人には、勿論、何故老婆が死人の髮の毛を拔くかわからなかつた。從つて、合理的には、それを善惡の何れに片づけてよいか知らなかつた。しかし下人にとつては、この雨の夜に、この羅生門の上で、死人の髮の毛を拔くと云ふ

事が、それ丈で既に許す可らざる悪であつた。勿論、下人は、さつき迄自分が、盗人になる氣でゐた事なぞは、とうに忘れてゐるのである。

そこで、下人は、兩足に力を入れて、いきなり、梯子から上へ飛び上つた。さうして聖柄の太刀に手をかけながら、大股に老婆の前へ歩みよつた。老婆が驚いたのは云ふ迄もない。

老婆は、一目下人を見ると、まるで弩にでも彈かれたやうに、飛び上つた。

「おのれ、どこへ行く。」

下人は、老婆が死骸につまづきながら、慌てふためいて逃げようとする行手を塞いで、かう罵つた。老婆は、それでも下人をつきのけて行かうとする。下人は又、それを行かすまいとして、押しもどす。二人は死骸の中で、暫、無言のまゝ、つかみ合つた。しかし勝敗は、はじめからわかつてゐる。下人はとうとう、老婆の腕をつかんで、無理にそこへ扭ぢ倒した。丁度、鶏の脚のやうな、骨と皮ばかりの腕である。

「何をしてゐた。云へ。云はぬと、これだぞよ。」

下人は、老婆をつき放すと、いきなり、太刀の鞘を拂つて、白い鋼の色をその眼の前へつきつけた。けれども、老婆は黙つてゐる。兩手をわなわなふるはせて、肩で息を切りながら、眼を、眼球が眶の外へ出さうになる程、見開いて、啞のやうに執拗く黙つてゐる。これを見ると、下人は始めて明白にこの老婆の生死が、全然、自分の意志に支配されてゐると云ふ事を意識した。さうしてこの意識は、今までけはしく燃えてゐた憎悪の心を、何時の間にか冷ましてしまつた。後に殘つたのは、唯、或仕事をして、それが圓滿に成就した時の、安らかな得意と滿足とがあるばかりである。そこで、下人は、老婆を見下しながら、少し聲を柔げてから云つた。

「己は檢非違使の廳の役人などではない。今し方この門の下を通りかゝつた旅の者だ。だからお前に繩をかけて、どうしようと云ふやうな事はない。唯、今時分この門の上で、何をして居たのだか、それを己に話しさへすればいいのだ。」

すると、老婆は、見開いてゐた眼を、一層大きくして、ぢつとその下人の顏を見守つた。眶の赤くなつた、肉食鳥のやうな、鋭い眼で見たのである。それから、皺で、殆、鼻と一つになつた唇を、何か物でも嚙んでゐるやうに動かした。細い喉で、尖つた喉佛の動いてゐるのが見える。その時、その喉から、鴉の啼くやうな聲が、嗄ぎ嗄ぎ、下人の耳へ傳はつて來た。

「この髪を拔いてな、この髪を拔いてな、鬘にせうと思うたのぢや。」

下人は、老婆の答が存外、平凡なのに失望した。さうして失望すると同時に、又前の憎悪が、冷な侮蔑と一しよに、心の中へはいつて來た。すると、その氣色が、先方へも通

じたのであらう。老婆は、片手に、まだ死骸の頭から奪つた長い抜け毛を持つたなり、聚のつぶやくやうな聲で、口ごもりながら、こんな事を云つた。

「成程な、死人の髪の毛を抜くと云ふ事は、何ぼう悪い事かも知れぬ。ぢやが、こゝにゐる死人どもは、皆、その位な事を、されてもいゝ人間ばかりだぞよ。現在、わしが今、髪を抜いた女などはな、蛇を四寸ばかりづゝに切つて干したのを、干魚だと云うて、太刀帯の陣へ賣りに往んだわ。疫病にかゝつて死なんだら、今でも賣りに往んでゐた事であろ。それもよ、この女の賣る干魚は、味がよいと云うて、太刀帯どもが、缺かさず材料に買つてゐたさうな。わしは、この女のした事が悪いとは思うてゐぬ。せねば、饑死をするぢやて、仕方がなくした事であろ。されば、今又、わしのしてゐた事も悪い事とは思はぬぞよ。これとてもやはりせねば、饑死をするぢやて、仕方がなくする事ぢやわいの。ぢやて、その仕方がない事を、よく知つてゐたこの女は、大方わしのする事も大目に見てくれるであろ。」

老婆は、大體こんな意味の事を云つた。

下人は、太刀を鞘にをさめて、その太刀の柄を左の手でおさへながら、冷然として、この話を聞いてゐた。勿論、右の手では、赤く頬に膿を持つた大きな面皰を氣にしながら、聞いてゐるのである。しかし、之を聞いてゐる中に、下人の心には、或勇氣が生まれて來た。それは、さつき門の下で、この男には缺けてゐた勇氣である。さうして、又さつきこの門の上へ上つて、この老婆を捕へた時の勇氣とは、全然、反對な方向に動かうとする勇氣である。下人は、饑死をするか盗人になるかに、迷はなかつたばかりではない。その時のこの男の心もちから云へば、饑死などと云ふ事は、殆、考へる事さへ出來ない程、意識の外に追ひ出されてゐた。

「きつと、さうか。」

老婆の話が完ると、下人は嘲るやうな聲で念を押した。さうして、一足前へ出ると、不意に右の手を面皰から離して、老婆の襟上をつかみながら、噛みつくやうにかう云つた。

「では、己が引剝をしようと恨むまいな。己もさうしなければ、饑死をする體なのだ。」

下人は、すばやく、老婆の着物を剝ぎとつた。それから、足にしがみつかうとする老婆を、手荒く死骸の上へ蹴倒した。梯子の口までは、僅に五歩を數へるばかりである。下人は、剝ぎとつた檜皮色の着物をわきにかゝへて、またゝく間に急な梯子を夜の底へかけ下りた。

暫、死んだやうに倒れてゐた老婆が、死骸の中から、その裸の體を起したのは、それから間もなくの事である。老婆はつぶやくやうな、うめくやうな聲を立てながら、まだ燃えてゐる火の光をたよりに、梯子の口まで、這つて行つた。さうして、そこから、短い白髪を倒にして、門の下を覗きこんだ。外には、唯、黑洞々たる夜があるばかりで

ある。

下人の行方は、誰も知らない。

（大正四年九月）

鼻

禪智内供の鼻と云へば、池の尾で知らない者はない。長さは五六寸あつて上脣の上から顎の下まで下つてゐる。形は元も先も同じやうに太い。云はゞ細長い腸詰めのやうな物が、ぶらりと顔のまん中からぶら下つてゐるのである。

五十歳を越えた内供は、沙彌の昔から内道場供奉の職に陞つた今日まで、内心では始終この鼻を苦に病んで來た。勿論表面では、今でもさほど氣にならないやうな顔をしてすましてゐる。これは專念に當來の淨土を渴仰すべき僧侶の身で、鼻の心配をするのが惡いと思つたからばかりではない。それより寧、自分で鼻を氣にしてゐると云ふ事を、人に知られるのが嫌だつたからである。内供は日常の談話の中に、鼻と云ふ語が出て來るのを何よりも惧れてゐた。

内供が鼻を持てあました理由は二つある。――一つは實際的に、鼻の長いのが不便だつたからである。第一飯を食ふ時にも獨りでは食へない。獨りで食へば、鼻の先が鋺の中の飯へとゞいてしまふ。そこで内供は弟子の一人を膳の向うへ坐らせて、飯を食ふ間中、廣さ一寸長さ二尺ばかりの板で、鼻を持上げてゐて貰ふ事にした。しかしかうして飯を食ふと云ふ事は、持上げてゐる弟子にとつても、持上げられてゐる内供にとつても、決して容易な事ではない。一度この弟子の代りをした中童子が、嚏をした拍子に手がふるへて、鼻を粥の中へ落した話は、當時京都まで喧傳された。――けれどもこれは内供にとつて、決して鼻を苦に病んだ重な理由ではない。内供は實にこの鼻によつて傷けられる自尊心の爲に苦しんだのである。

池の尾の町の者は、かう云ふ鼻をしてゐる禪智内供の爲に、内供の俗でない事を仕合せだと云つた。あの鼻では誰も妻になる女があるまいと思つたからである。中には又、あの鼻だから出家したのだらうと批評する者さへあつた。しかし内供は、自分が僧である爲に、幾分でもこの鼻に煩される事が少くなつたと思つてゐない。内供の自尊心は、妻帶と云ふやうな結果的な事實に左右される爲には、餘りにデリケイトに出來てゐたのである。そこで内供は、積極的にも消極的にも、この自尊心の毀損を恢復しようと試みた。

第一に内供の考へたのは、この長い鼻を實際以上に短く見せる方法である。これは人のゐない時に、鏡へ向つて、いろ〳〵な角度から顔を映しながら、熱心に工夫を凝らして見た。どうかすると、顔の位置を換へるだけでは、安心が出來なくなつて、頰杖をついたり頤の先へ指をあてがつたりして、根氣よく鏡を覗いて見る事もあつた。しかし自

分でも滿足する程、鼻が短く見えた事は、是までに唯の一度もない。時によると、苦心すればする程、却て長く見えるやうな氣さへした。丙供は、かう云ふ時には、鏡を箱へしまひながら、今更のやうにため息をついて、不承不承に又元の經机へ、觀音經をよみに歸るのである。

それから又丙供は、絶えず人の鼻を氣にしてゐた。池の尾の寺は、僧供講說などの屢行はれる寺である。寺の丙には、僧坊が隙なく建て續いて、湯屋では寺の僧が日毎に湯を沸かしてゐる。從つてこゝへ出入する僧俗の類も甚多い。丙供はかう云ふ人々の顏を根氣よく物色した。一人でも自分のやうな鼻のある人間を見つけて、安心がしたかつたからである。だから丙供の眼には、紺の水干も白の帷子もはいらない。まして柑子色の帽子や、椎鈍の法衣なぞは、見慣れてゐるだけに、有れども無きが如くである。丙供は人を見ずに、唯、鼻を見た。——しかし鍵鼻はあつても、丙供のやうな鼻は一つも見當らない。その見當らない事が度重なるに從つて、丙供の心は次第に又不快になつた。丙供が人と話しながら、思はずぶらりと下つてゐる鼻の先をつまんで見て、年甲斐もなく顏を赤めたのは、全くこの不快に動かされての所爲である。

最後に、丙供は、內典外典の中に、自分と同じやうな鼻のある人物を見出して、せめても幾分の心やりにしようとさへ思つた事がある。けれども、目連や、舍利弗の鼻が長かつたとは、どの經文にも書いてない。勿論龍樹や馬鳴も、人並の鼻を備へた菩薩である、丙供は、震旦の話の序に蜀漢の劉玄德の耳が長かつたと云ふ事を聞いた時に、それが鼻だつたら、どの位自分は心細くなくなるだらうと思つた。

丙供がかう云ふ消極的な苦心をしながらも、一方では又、積極的に鼻の短くなる方法を試みた事は、わざわざこゝに云ふ迄もない。丙供はこの方面でも殆出來るだけの事をした。烏瓜を煎じて飲んで見た事もある。鼠の尿を鼻へなすつて見た事もある。しかし何をどうしても、鼻は依然として、五六寸の長さをぶらりと脣の上にぶら下げてゐるではないか。

所が或年の秋、丙供の用を兼ねて、京へ上つた弟子の僧が、知己の醫者から長い鼻を短くする法を敎はつて來た。その醫者と云ふのは、もと震旦から渡つて來た男で、當時は長樂寺の供僧になつてゐたのである。

丙供は、いつものやうに、鼻などは氣にかけないと云ふ風をして、わざとその法もすぐにやつて見ようとは云はずにゐた。さうして一方では、氣輕な口調で、食事の度毎に、弟子の手數をかけるのが、心苦しいと云ふやうな事を云つた。丙心では勿論弟子の僧が、自分を說伏せて、この法を試みさせるのを待つてゐたのである。弟子の僧にも、丙供のこの策略がわからない筈はない。しかしそれに對する反感よりは、丙供のさう云ふ策略をとる心もちの方が、より強くこの弟子の僧の同情を動かしたのであらう。弟子の僧は、丙供の豫期通り、口を極めて、この法を試みる事を勸

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo